



特定医療法人社団

鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス
<http://www.goodream.co.jp/hoyukai/>

第63号

発行:2011年7月15日
発行責任者:
特定医療法人社団 鵬友会
事務局長 池島 守

～看護力を高めることを継承して～

高齢者看護の中で看護必要度の定着化を図る

湘南泉病院 看護部長 片桐恵美子



湘南泉病院に勤務して10年、4月から看護部長の職責を担うことになりました。

3. 11の大震災で原発の不安や動揺が日本中を暗くして先の見えないトンネルの中にいた時期でした。あれから4ヶ月が経過しても復興がなかなか進まない現地からの報道を耳にして心痛む昨今です。

湘南泉病院の看護部職員は130余名で高齢者看護が主軸の患者さまに満足していただける医療と看護の担い手として日々努力しています。社会的に高齢者看護の専門性が認識されつつある今日ですが高齢者ゆえ発生する困難やマイナス面がフィジカルアセスメントを複雑化しています。

昨年4月から当院はDPC（診断群別支払方式）と看護必要度が開始されてチーム医療の連携で順調な経過を辿っています。

今年度は看護職員が看護必要度についての理解を深め定着化することを目標に推進を図っています。看護のあり方として看護必要度を評価することが重要視され、実際の場面での活用の有益性も示されています。

当院においても10:1看護で必要度を運用しておりますが看護職員の適正配置や患者さまのスクリーニングから各病棟の重症度の割合などの多様な活用ができます。このような客観的で合理的な「評価と判断」に基づいた看護活動のマネジメントツールを採用しています。

平成19年、看護必要度の研修会へ参加しその有効性と多様性は画期的と感動しました。研修後即刻シュミレーションを実施・報告したことを昨日のように思い出されます。

看護必要度の評価チェック項目にはその患者さまが受けている処置や治療の程度を評価するA項目と、患者さまの状態を評価するB項目が数量化されて得点表示で病状経過と変化が表出されます。

昨年、ケアマネ業務を兼務して利用者の認定調査を十数件実施し利用者のADLの項目と看護必要度のB項目の詳細内容がリンクしていることを発見しました。

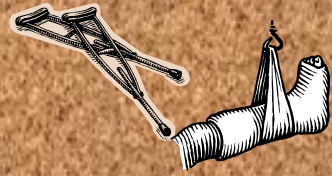
当院の患者さまはB項目が高く評価され、ようやく高齢者看護が認められる時代へ入ってきたように思います。そして看護必要度の評価の信頼性を一層高める目的で院内研修会を開催し意見交換をして看護職員の定着化を図っていきたいと思っています。

更に、今後の課題としては看護必要度導入後の看護記録の監査項目の改訂と監査実施を予定していますが、その前に看護必要度に求められる看護記録を目指し、効果的な記録方法と個々の記述力の向上を求め取り組んでいきたいと思っています。

以上の課題を達成することで看護力アップが図られ患者さま・ご家族さまにより一層信頼される看護部へ繋げていきたいと思っています。

高齢者の骨折について

～第16回 市民向け医療・福祉講座 開催！～

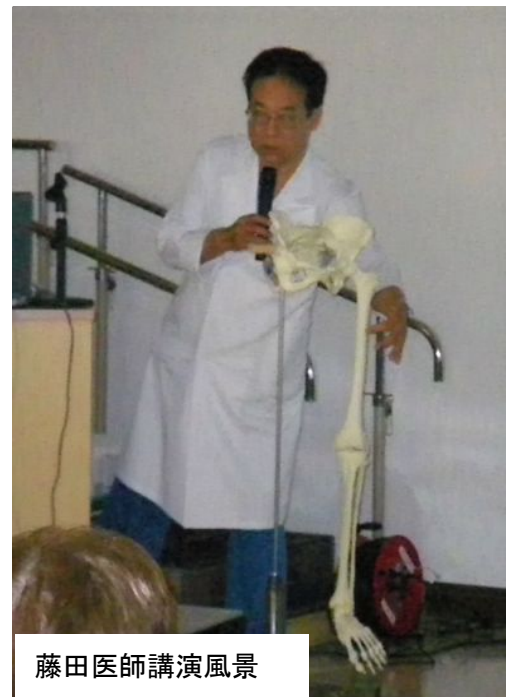


児玉理事長

平成23年6月17日（金）14時から湘南泉病院において、市民向け医療・福祉講座を行いました。今回のテーマは“**高齢者の骨折について**”。参加申し込み受け当初から、施設関係者等の反響が大きく、急遽会場を会議室からリハビリ室へ変更しての開催となりました。

まず、児玉理事長が開会の挨拶を行い「病気の治癒は“治療者”“看護・介護者”“家族のご理解・ご支援”の3つの柱が一体となって完結する。」と話し、「看護・介護に携わっている方々、家族の方々のご意見を是非お聞かせ下さい。それが我々の勉強にもなります。」と述べました。

次に、湘南泉病院整形外科部長の**藤田医師**が、年間約160件の手術実績をもとに“**高齢者の骨折の現状**”について講演し、中でも高齢者に多く見られる大腿骨近位部骨折のメカニズムや手術の方法について、模型やスライドを用いて分かり易く解説しました。その中で藤田医師は、「骨折の予防では、その方の性格まで思い図った目配り・気配り・心配りが大切」とし、「全員に歩ける様になるための手術を施していますが、実際に歩けるかどうかは本人の意欲が大きく関わっています。紹介状を良く読んで頂き、積極的に歩行訓練を行って下さい。」と参加者へ向けてメッセージを送りました。続いて、術前術後の患者との関わり方



藤田医師講演風景

について看護とリハビリの立場から報告

を行い、**門馬看護師**は、疼痛や褥瘡、創部感染や深部静脈血栓症（エコノミー症候群）といった術前術後に発生しやすい症状についての説明や、患肢の動きと知覚についての“**看護のポイント**”などを話し、「術後は出来るだけ早く離床を果たすことを目標に看護を行っています。」と述べ、さらに**岡本理学療法士**は“**リハビリについての事例**”を挙げ、「リハビリを進める上で家族・施設の方のサポートが重要」とし、「入院中だけではなく退院後も無理なく楽しく行うことが大切です。」と述べました。

その後の質疑応答では、「夜間受傷した際、受診すべきかどうかの判断基準」についてや「家庭や施設で簡単にできる応急処置」について、また「藤田医師が手術前に行っている歩行能力予後予測について具体的に教えて欲しい」等たくさんのご質問を頂き、16時半に終了しました。



講演者：右から、藤田医師、門馬看護師、岡本理学療法士



会場風景